

Interlanguage の視点

西川 盛雄

Toward a Theory of Interlanguage

Morio NISHIKAWA

(Received May 21, 1990)

This paper aims at investigating the linguistic process of interlanguage in terms of error analysis of English sentences which Japanese students composed in an English class. Interlanguage is the intermediate stage observable in learner's language between the source and target language. In order to do research on the approximative system of interlanguage, we consider language ability to be the intellectual linguistic ability to check output sentences for whether they are grammatical or not and to feed this information back. An elaborated study of interlanguage based upon the collected data will make a contribution to our understanding of the processes of English education for Japanese learners.

Key words : interlanguage, error analysis, approximative approach, source language, target language

(1) はじめに

英語の需要は近年ますます大きくなっており、英語を学ぶ機会や設備そして方法論も年々充実してきていることは否めない。しかし、英語教育の現状はまさに混沌である。多くの「理想」も制度的、社会的な「現実」を前にして、多くは随分の遠まわりをするか、挫折の憂きめをみるかしている場合が多い。大学においては、例えば、一週間 100分の授業を2回受けたとして週 200分、一年で一回につき30週授業があるとしても（実際はいろいろな事情でこれを下まわるが）6000分、これを時間に直すと 100時間、さらにこれを日に直すとじつに 2.5日になってしまう。一年 365日のうち2日と半分ということになってしまう。数字の魔術に陥らないようにしなければならないが、それにしても少ない時間数であることは間違いない。授業外の個人的努力を前提にしても、この中で、しかも一般的には英語を日常的に使うという生活の連続性がないところで何をどう考えていけばいいのであろうか。

本稿では日本人の作り出す英語をありのままにみて、その中にある共通した問題点を整理すべきであるという観点から Interlanguage の問題を若干でも考えていってみたいと思う。例（ケース）は多くは取り上げられなかったがなるべく典型的なものを取り上げ、議論を進めてみた。

Interlanguage（以下 IL と略記）とはある人が根元にもっている母国語（Source Language；以下 SL と略記）と習得の目標となる外国語（Target Language；以下 TL と略記）の間にあって獲得する中間的、媒介的な少し「おかしな」外国語である。例えば日本人が英語を学ぶ場合、SLである日本語の影響を受けた少し「おかしな」英語を作り出す時期が必ずあり、しかもこれは程度の差こそあれどこまでいってもつきまとう。問題は日本人が英語を学ぶ上で、SLである日本語が TLである英語を獲得していく上でどのような影響を与えているかということである。この問題は

日本語の影響を受けた英語、英語の体裁は取っているがその背後に日本語の顔をひそませている英語、つまり IL をどう捉えるかという問題としてけっして見過ごすことは出来ないものである。

本稿では IL についての言語学、英語学的考察を試みている。ここではすべての言語学的部門 (component) に渡って触れることは出来ないので、文法的に Syntax, Semantics に限って具体的かつ基本的な例に触れながら IL の諸問題を考察していってみたい。そのための基礎資料として、筆者がここ 5 年間日本人の学生 (ここでは熊本大学の学生) 2 年生, 3 年生の学生 481 人に 60 分という時間制限を置いて各人の一番書き易いテーマにもとづいて書いてもらった英作文の結果を用いている。

(2) 言語能力とはどういう能力のことか

ある言語が出来る出来ないの議論は日常茶飯事であるが、それでは言語が出来るとは (従って出来ないとは) いったいどういうことであろうか。つまり言語能力というときそれはいったい人間のどういった能力のことであろうか。結論的にいえば、言語能力とは表現者によって自ら output として作り出した言語表現が、表現としての妥当性があるかどうかを自ら識別 (check) あるいは制御 (feed back) することのできる能力のことである。私達の日常の言語生活においてコミュニケーションを成功させようとするれば、私達の発した表現が表現としての妥当性があればそれをすすめていくことが出来るが、もしエラーがあり、「おかし」ければ直ちにこれを訂正することができなければならない。言い替えれば自らの言語表現に対するフィードバックの能力を十分備えていなければならないのである。例えば、英語の標準的な話し手は tall [tɔ:l], call [kɔ:l], ball [bɔ:l], mall [mɔ:l] 等を間違えることは基本的にはない。もし間違えた場合、それは直ちに訂正することが出来るであろう。また語形成における接頭語、接尾語の使い方やその配列の順序性においても、(例えば act-active-activity, act-*activity-*active), 統語論的な語配列の在り方の「おかしさ」においても (例えば John walks., *Walks John.), 意味論的、語用論的な「でたらめ」や Grice (1975) の協調の原理 (Cooperative Principle) あるいは Leech (1980) の politeness を破った「非常識」な表現においてもおかしければそれを直ちに訂正することができるのであろう。

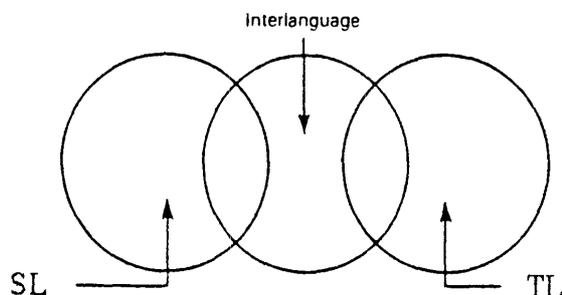
さらに私達は具体的なコミュニケーションの場では話し手からすべての情報を得ているわけではない。聞き手の立場では、与えられたある程度の既知の情報をいわばヒントにして話者の意図されるところを推論することが期待される場合が多い。このように、聞き手における言語能力とは、与えられた情報を考慮しながら話者の意図するところを推論することができる能力であり、また、表現されておらず、いわば欠けている情報をコンテキストに見合って復元することができる能力 (recoverability) ということになる。

ここでは言語能力とはフィードバックの能力であるという視点に重点を置いて論を進めていきたいと思う。この視点は当然のことながら、実際の言語表現におけるいわゆる「あやまり」、「おかしさ」の認識とその訂正という Error Analysis の視点を重視することになって来る。

(3) Interlanguage (IL)

外国語学習者の無意識的な error には IL の問題が存在している。IL は SL から TL への過渡

期の言語として位置づけられ、母国語からの影響を受けた外国語、見方を変えれば、まだ十分目標とする外国語に成りきっていない外国語という側面をもっている。これは図式的には SL と TL との intersection として次のように描くことができる。



このアプローチは SL から TL への過渡的、ダイナミックなものとして捉えるところから W. Nemser (1971) によって Approximative System と呼ばれ、次のように説明されているものである。

An approximative system is the deviant linguistic system actually employed by the learner attempting to utilize the target language.

ここで 'deviant' という逸脱をあらわす用語が使われているが、これは日本語で誤解を覚悟でいえば「おかしき」や「あやまり」という言い方に対応してくる用語である。

外国語 (TL) を学ぶ者が作り出す多くの表現上の「おかしき」はこの IL に由来する。この「おかしき」にはそれなりの言語学的あるいは言語習得上の合理的な理由がある。「おかしい」から、だめなのではなく、むしろその「おかしき」あるいは「あやまり」の由って来る理由を我々は理解しなければならないのである。

たしかに心理学的にコミュニケーションの場に関わる者（話し手、聞き手）の情緒の問題として、表現と理解の場においては表現することが楽しくも快く、理解することが「わかる」ということで会話の場に楽しくも快く参加していくということは言語習得上の大切な要因である。しかし楽しく、快い雰囲気を作りさえすればそれでいいのだろうか？ 母国語の習得ならいざ知らず、外国語の、しかもある程度年齢が経ち、日常的にそれを生活の中で使うことがないという状況における外国語の習得においては、少なくとも言語学的に裏打ちされた何らかの strategy あるいは核になるような視点が用意されていなければならない。

この視点を示唆してくれるものの一つに IL あるいは error analysis の strategy があると思われる。つまり表現されたもののうち「おかしき」や「あやまり」はだめとして切り捨てられるべきものではなく、むしろ IL の視点において、その由来が具体的なケース・スタディを通して見えてくるかもしれないのである。

(4) ケース・スタディ

それではここで具体的なケースに当たりながら IL の問題を考察していってみたい。それは単に

エラーの収集にとどまらず、その因って来るべき理由を考えていくことになる。ここに日英比較と言語学的な構造分析が方法論として大きな意味をもってくることになる。ここですべてのケースについて述べることはとうてい出来ないの、ILにおける誤用の引用例はきわめて典型的かつ基礎的な例に限られている。

ケース1：直示的 (Deictic) 誤用

- (1) a. *Here is Kumamoto.
b. ここが熊本です。

<IL の視点>

日本語の「ここ」が英語の 'here' に常に等しいとして機械的に一対一対応関係において関連づけられている。

<説明>

(1a)において 'here' は 'there' に対応する deictic (直示的) な副詞である。その意味解釈において 'in/at this place' を内包しており、主語が 'Kumamoto' である限りにおいて全文は「ここに熊本がある」ということになる。しかし意図されている意味は (1b) である。従って新情報としての主語は指示代名詞「ここ」である限りにおいてひとつの解釈として (1a) の主語は主語に成りうる「ここ」、つまり 'this' でなければならない。

- (2) This is Kumamoto.

この場合は、たとえば地図を出して deictic に 'Kumamoto' という場所を指示している場面が想定されうる。ところが旅をして列車あるいは飛行機で熊本に到着したとき、例えば迎えにきた人、あるいは同行者で熊本を知っている人が仲間に「(さあー着きました。) ここが熊本です。」と言っている場合、

- (3) Here we are in Kumamoto.

ということになるであろう。この場合、'here' は deictic な副詞であり、be 動詞と結びついて近称におけるある人(もの)の「存在」を表し、場所的にはここでは 'in Kumamoto' に結びついている。さらに(3)における主語は (1b) では潜在的に隠されてある人称代名詞 'we' であって、'here' でも 'this' でもないのである。

このように日本語の「ここ」は deictic な役割を果しつつも副詞としての 'here' であったり、近称を表わす指示代名詞としての 'this' であったりする。しかし下の例で見るように 'here' と 'this' は互いに全く異なる範疇と機能を持った別々のものなのである。

- (4) a. Here is a dictionary.
(ここに辞書があります.)
b. This is a dictionary.
(これは辞書です.)

- (5) a. Here it is.
(さあー、これをどうぞ.)

b. *This it is.

(6) a. Here he comes!
(彼がやって来るよ.)

b. *This he comes!

次に「ここは何処なのだろう？」に対する英語として

(7) *Where is here?

という IL が作りだされているが、ここでの非文の由来は主語 (NP) が存在していない点に加えて、'here' イコール「ここ」の短絡的關係づけにある。さらに 'here' を 'this' に置き換えて

(8) Where is this?

とした場合、'this' は文法的な主語として、また既知の情報として話し手と聞き手の間で共有された知識であり、それが何を指示しているかが写真や同種のもので明らかであるというような前提が働いている場合、「これは何処 (にあるの) ですか？」という意味合いにおいて受け入れられるが、「ここは何処なのだろう？」という意味をもつことはけっしてない。むしろ英語では

(9) Where are we?

ということになるであろう。

ケース 2：叙述形容詞の欠落誤用

(10) a. *He is thirty five years.
b. 彼は35才です。

<IL の視点>

日本語の年齢を表わす名詞「才」の部分が英語の名詞 ('years') に置き替わり、英語に必要な年齢を表わす叙述形容詞 ('old') が欠落している。

<説明>

一般的に英語の [A is B] の構文においてはAが NP でBもまた NP の場合、Bの NP はAの NP を下位範疇化 (subcategorize) する傾向をもっており、AとBとでは基本的な semantic feature を共有している。例えば次の(11)において

(11) John is a stenographer.

'John' は '(a) stenographer' によって subcategorize されており、両者は少なくとも [+animate], [+human] の意味特徴を共有している。そしてここに 'John = (a) stenographer' という関係が成立しているのである。ところが (7a) においてはすでに 'he'(A) と 'years' (B) の間では意味論的に incompatible であり、語用論的にも irrelevant である。"he = years" という関係はいかなる意味においても成立しないだけでなく、さらにここでは「才」は 'years' に常に等しいという対応関係が先走っている。基本的に、英語ではBがAについての属性を表わすときBは叙述の形容詞を取る。従って (7b) の英文は

(12) He is fifty five years old.

となり、主語 'he' についての属性としての年齢の程度（度合）が叙述形容詞 'old' で生かされていないなければならないのである。

問題は日本語では英語の 'old' に相当する叙述形容詞は必ずしも必要ないということである。「AはBです」の構文の中ではBは様々なものを取り出すことができる。このことが「AはBです」が「A is B」と常に等価であるという誤解を生じさせてしまうのである。以下の例がこのことを物語っている。

(13) a. *He is two meters.
b. He is two meters tall.
c. (彼は<背丈>2メートルです.)

(14) a. *English is very need for me.
b. English is quite necessary for me.
c. (英語は私にはとても必要です.)

ケース3：「です = Be」誤用

(15) a. *I am agree with you.
b. 私はあなたに賛成です。

<IL の視点>

日本語の「X-です」において、これを英語にする場合すべての表現が be 動詞を使う copula 構文に当てはめてしまえるとは限らない。また英語では統語論上述語動詞が二つ以上列んで用いられることはない。

<説明>

日本語で「私はXです」の構文を英語にした場合、「I am X」とする場合はたしかに少なくない。例えば

(16) a. I am a lawyer.
b. I am a student.
c. I am a pianist.

といった具合である。しかし日本語の「私はうなぎだ(です)」でよく議論されるように、必ずしも「私はXです」と「I am X」とが一对一に対応するとは限らない。コンテキストによって「私はXです」は実に様々な様相を帯びてくる。

(17) a. あなたは何処出身ですか？
b. 私は神戸です。
c. *I am Kobe.

(18) a. あなたは朝食には何を食べますか？
b. 私はパンです。
c. *I am bread.

- (19) a. あなたの好きな音楽家は誰ですか?
 b. 私はモーツァルトです.
 c. *I am Mozart.

さらに、Xのところに漢語の抽象名詞が入ってきた場合どうであろうか？例えば「賛成-です」, 「休憩-です」, 「中止-です」, 等々である。

これらの例では(17)–(19)の場合と違って通常Xのすぐ後ろに「-する」を入れることができる。

- (20) a. 賛成-する
 b. 休憩-する
 c. 中止-する
- (21) a. *神戸-する
 b. *パン-する
 c. *モーツァルト-する

(15 b) の場合、「賛成です」はその背後に動詞「賛成する」の終止形を内包しており、その生成は「する」と助動詞「です」の共起が許されないという観点から次のような過程を通ると考えられる。

- (22) a. [[賛成]_N する]_v
 b. *[[[賛成]_N する]_v です]_{vp}
 c. [[[賛成]_N φ]_v です]_v です]_{vp}

従って(15 b)においては「賛成する」(agree)を主動詞として唯一これのみを用いなければならない。つまり(15 b)に許された英文の軸は

- (23) [I [INFL [agree]]] (with you)

であって、一つの文において‘be’と‘agree’の二つの主動詞の重複が許されない限り、

- (24) [I [INFL [be agree]]] (with you)

が生ずることは許されない。主動詞が‘agree’である限り(15 a)は次のようであなければならない。

- (25) I agree with you.

このように、日本語でXが名詞で「X-です」が動詞として成立するための条件は、「X-する」が成立し得るようなXでなければならない、ということになる。

ケース4：天候・気候の「です= Be」誤用

- (26) a. *It was snow yesterday.
 b. 昨日は雪でした。

<IL の視点>

天候や気候を表す場合、日本語の「名詞+断定の助動詞(だ, です)」の構文の中の名詞は英語ではその名詞から派生する動詞や形容詞として顕在化してくる。

<説明>

(26 b) では「太郎は学生でした」(「太郎=学生」)で見られるような下位範疇の関係が(「昨日=雪」)にみられるようなかたちで成り立っているわけではない。むしろ「雪でした」とは「雪が降った」という意味の述語であると解されねばならない。従って(26 a)は以下のように訂正されねばならない。

(27) It snowed yesterday.

このことは「雨」の場合も同様である。

- (28) a. *It was rain yesterday.
 b. 昨日は雨でした。
 c. It rained yesterday.

(26 b) の「雪でした」は上のような動詞とは違って「雪の多い」または「雪の降り積もった」という主旨の形容詞と解した場合(26 a)は以下のように訂正され得ることも考えられる。

(29) It was snowy yesterday.

このことは「霧」の場合についても言えることである。

- (30) a. *It was fog yerterday.
 b. 昨日は霧でした。
 c. It was foggy yerterday.

このように天候や気候を表わす場合、日本語の「名詞+断定の助動詞」の中にはその名詞に直接関係する英語の動詞または形容詞の意味を内包していることがわかる。従って、英語にする場合、日本語のこの種の名詞表現は英語では動詞または形容詞表現となって現れてくるのである。

ケース5: 「出来る = can」 誤用

- (31) a. *I want to be can drive a car.
 b. 私は車を運転できるようになりたい。

<IL の視点>

ここではまず第一に日本語の「できる」が英語の法助動詞 'can' に等しいとして機械的な一対一の対応関係が働いてしまっており、第二に「できる」が形容詞とみなされ、英語の形容詞 'able' ではなく助動詞 'can' に対応させられている。

<解説>

基本的に英語の 'can' は modality のうち蓋然的な可能性を表わす助動詞である。日本語の「できる」は「ある方面の才能がある」という意味で自動詞の上一段活用である。両者とも能力を表わすときその程度あるいは度合いを示唆する限りにおいて形容詞的な意味を内包する。そこにいはば落とし穴がある。

- (32) a. 彼はドイツ語がよくできる。
b. 彼女は数学がよくできる人だ。

しかし実際には「できる」を表わす英語の形容詞は 'able' であって 'can' ではない。

- (33) a. He is an able teacher.
b. He is a man able to perform military service.

(31 a) においては be 動詞のすぐ後ろに法助動詞が来ることは英語のルールからしてありえない。にもかかわらず、'can' が来てしまっているのは 'can' が助動詞としての認識よりも形容詞としての思い込みが先行してしまったからである。その背後にあるものは、「できる」= can の一面的な思い込みである。(31 a) においてはあたかも can が 'able' の役割をすべて奪ってしまった感がある。(31 b) の英文は実際には次のようなものであることが要求される。

- (34) I want to be able to drive a car.

'can' が形容詞と混同されるのに対して他方で本動詞とうっかり混同される場合がある。

- (35) *I want to play piano. but I can't it.

'piano' の前に定冠詞 'the' が必要であるという議論は一方においてあるが、ここでは「それができない」という主旨で、後続の 'but' 以下のところに必要な主動詞 do が抜け落ちているところに興味深い IL の問題があるといわなければならない。ここでは日本語「できる」の影響で 'can' の中にすでに do の意味が入りこんでいると錯誤されてしまっているのである。

ケース 6：「に行く = go to」誤用

- (36) a. *It is my hope to go to journey around the world.
b. 世界を巡る旅に出かけることが私の希望です。

<IL の視点>

日本語の「X-に行く(出る)」のXを吟味することなく、また不必要な場合にも「-に」に対して英語では to を対応させてしまう。

<説明>

日本語の「旅行に行く(出る)」、「働き(仕事)に行く(出る)」、「買物に行く(出る)」、「授業に行く(出る)」等々、「Xに行く(出る)」を英語にする場合Xをよく吟味することなく学生は無意識に 'go to X' としてしまう場合が少なくない。その結果「おかしな」英文が出来上がってしまう。

- (37) a. *I will go to a travel.
(私は旅行に行くつもりだ.)
b. *I go to shopping.
(私はショッピングに行きます.)
c. *I went to swim with my friend.
(私は友達と泳ぎに行きました.)

既に見たように日本語の「X-に行く(出る)」のXは必ずしも destination でなくてもよい。しかし英語の 'go to X' の 'go' はそもそも 'come' に対応したある方向性をもった deictic verb であ

る。従って方向性の指し示すいわば destination が場所として示唆されていなければならない。つまり、'go to X' がある場合その X は destination なのである。そこで 'to' の後ろに来る語が場所を示唆する destination たり得ているかどうかの問題になって来る。さらに付言しておくべきことは 'go' の後ろの 'to' はけっして infinitive を表わす 'to' ではないということである。

かくして (36 b) の英文では「旅に出る」の「旅」(journey) が destination になってしまうという「おかしな」ことになってしまう。(36 b) の主旨を生かした英文は

(38) It is my hope to go on a journey around the world.

ということになる。

次に英語における「to X」の X が deictic に場所を示す副詞の場合、to は X に吸収されるかたちになって消える。しかしそこに日本語の「X-に」の感覚が干渉してきた場合、'to' は保存されて非文になってしまう。以下がその例である。

(39) a. *It takes an hour to go to there.
b. *Please come to here.

ケース7：「なる = Become」誤用

(40) a. *I read English very often, and I became to read.
b. 私は英語をよく読んで、そして読めるようになりました。

<IL の視点>

日本語の「なる」は必ずしも英語の 'become' ではないということ。

<説明>

当然のことながら (40 a) においては一つの文の中に同じ動詞が二度も使われているが故に配慮しなければならないこともあるが、IL の立場で何よりもここで注目しなければならないことは 'become to' の使われ方である。例えば、次のような例においては「なる = become」の一对一对応関係が成立しているようである。しかもこの対応関係は IL として非常に頑固なものがある。それは次のような日常的な例に由来するものであろう。

(41) a. He became an artist.
(彼は芸術家になった.)
b. She became known to us all.
(彼女は我々みんなに知られるようになった.)

しかし、基本的に (40 a) のように結果が能力として何かが出来るようになり、かつそれが動詞で表される場合 'become' は使われない。むしろ「なる」の概念はある過程を経た結果としてもたらされてくるものという観点において了解されなければならない。つまり過程を前提にして結果に焦点 (focus) が置かれるのである。従って結果をもたらす「過程」も明示されてはじめて「なる」が成立してくるのである。かくして (40 a) の後節は例えば次のように書き改められうる。

(42) a. I came to (be able to) read it.
b. I learned to (be able to) read it.

同様の議論が次のような例 (ケース) においてみられる。

- (43) a. *These days I became to be interested in cooking.
b. *I have become to like animals more than before.

ケース 8：語順の誤用

- (44) a. *It takes one hour half to go there.
b. そこに行くのに 1 時間半かかります。

<IL の視点>

日本語の語順が英語の語順にそのまま横滑りしている。

<説明>

日本語の語順は類型学的には SOV 型といわれ、英語においては SVO 型といわれる。関係節を含む名詞句では日本語の場合名詞は関係節の後ろに来るが（例えば、「昨日私が買った本」）英語では前に来る（例えば、「the book (which) I bought yesterday」）。主動詞を修飾する副詞は日本語では動詞の前に来るが（例えば、「速く走る」）英語では後ろに来る（例えば、「run fast」）。このように様々なかたちで日本語と英語とでは語順の制約が異なるのである。

「一時間半」は英語では “half an hour” であるがこれを並列させると次のようになる。

- (45) a. 一 時間 半
b. one hour half

これはすなわち (43 a) で示されている「おかしさ」そのものである。つまり日本語の語順が英語の語配列の順序性の中に横滑りしてきたのである。例えば (43 b) の英文は次のようなものであるだろう。

- (46) It takes half an hour to go there.

他に名詞句を修飾する語順として

- (47) a. *No snow winter is not beautiful.
b. 雪のない冬は美しくない。
c. Winter without snow is not beautiful.

他に副詞の位置として次のようなものがある。

- (48) a. *I like very much skiing.
b. 私はスキーがとても好きです。
c. I like skiing very much.
- (49) a. *She speaks slowly English.
b. 彼女はゆっくりと英語を話す。
c. She speaks English slowly.

(5) ま と め

このように IL はある目標とする外国語 (TL) の学習者が母国語 (SL) から強い影響を受けて作り出した過渡的な「外国語」である。当然のことながら標準的な native speaker の立場からは程度の差こそあれ「おかしさ」や「あやまり」はつきまとう。しかしこれは「おかしい」からといって切り捨てられるべきものではなく、むしろこれはある母国語を持った人々の例えば英語表現の「あやまり」あるいは「おかしさ」の特徴抽出のためには計り知れない重要な基礎資料となる。本稿では日本人の作り出す英語の「おかしさ」の一般的傾向をみるために IL の視点から error analysis を試みた。様々な現象をすべて扱うことはできないので日本人の英語学習者にとって基本的なケース (事例) を若干でも述べ、吟味してみたつもりである。

そのための前提となる概念規定として、言語能力とは話し手、聞き手にとって言語のどういう能力のことかについて、フィードバックの観点から「言語能力とは自らが output として作り出した表現が表現としての妥当性があるかどうかを自分ら識別 (チェック) することのできる能力」と位置づけておいた。もちろんこれは言語学上の各部門にわたって当てはまることはいうまでもない。

IL の視点をさらに詳細にかつ体系的に見ていくことによって「日本人の英語」の誤用の特徴が母国語との関係において抽出され、それを積極的に評価 (evaluate) することによってわが国における英語教育の領域に少しでも貢献出来るものがあるかもしれない。

参考文献

- Ando, S. (安藤貞夫) 1986. 「英語の論理・日本語の論理」, 大修館
Corder, S.P. 1967. "The Significance of Learner's Errors", in J.C. Richards (ed.), Longman
Grice, P. 1975. "Logic and Conversation", in *Syntax and Semantics*, Vol. 3 (eds. Cole and Morgan), Academic Press
Leech, G.N. 1983. *Principles of Pragmatics*, Longman, London
Matsui, E. (松井恵美) 1979. 「英作文における日本的誤り」, 大修館
Nemser W. 1971. "Approximative Systems of Foreign Language Learners", in J.C. Richards (ed.), Longman
Petersen, M. 1988. 「日本人の英語」, 岩波新書
Richards, J.C. (ed.) 1974. *Error Analysis*, Longman
Selinker L. 1972. "Interlanguage", in J.C.Richards (ed.), Longman